

## 目次

14 まとめ	1
14.1 「生命と時間」より抜粋	1
14.1.0 はじめに	1
14.1.1 生命=時間、機械=空間、死=絶対的無	1

## 14 まとめ

この講義は、郡司ペギー幸夫の論説 [5] によって切開かれた新しい生命理論の理解に向けての一連の作業の一つである。この理解において手がつけられなかった「数学の不定性」は、数論的代数幾何学者角田秀一郎の一連の論説・講義 [6, 7] により詳しく解説された。この講義は、いわば、その角田の解説への準備という性格のものであった。

### 14.1 「生命と時間」より抜粋

#### 14.1.0 はじめに

- [1] 問題を局所の存在者、単独者に当てる。
- [2] 単独者は記述という立場と相容れない。
- [3] 言語を使用することと記述することとの違いが明確に意識されるような理論構成が必要となる。

#### 14.1.1 生命=時間、機械=空間、死=絶対的無

##### 1.1 単独者への契機：生命、機械、死 1:143

- [1] 観測者を持ち込んで事態を捉えんとするなら、機械も生命も共にパラドキシカルである。
- [2] 機械、生命における違いは、観測者の位置に起因する。
- [3] 対象内部に座した観測者は、使用規則が決定できない矛盾に直面する外部観測者と同様、対象内部の言語規則を決定できないという矛盾に直面する。
- [4] 観測対象である機械制御に関する矛盾は、対象の外部、すなわち機械と使用者の間に隠蔽される。
- [5] 内部観測者にあっては記述対象内部に観測者と対象の関係が内在するため、矛盾は隠蔽できない。

- [6] 機械と生命の弁別は恣意的である。
- [7] どの対象に内部観測者の立場を取るべきかを決定できない。生命とは何かは擬似問題である。
- [8] 生命において矛盾や自己言及が本質的特性としてとり出されるのではなく、記述を旨とする観測者の立場からは矛盾しか帰結し得ないというに過ぎない。
- [9] 機械に対峙する観測者は、対象の特徴の列挙を有限の行為でとどめ、有限列で対象の客観的定義が根拠付けられるか否かに関して、無頓着である。  
他方、生命に対峙する観測者は、記述、言葉を列挙するという形式が何物かを表象するという態度を（矛盾を経験することで）反古にした上で生命という語がただ使われるのだということを感じ得る。すなわち、生命に於いては、観照者・記述者としてではない観測者の立場が現前する。
- [10] 普遍性：特殊な列挙では語り尽くせない何物かとしての契機。あらゆる相矛盾する列挙的定義を超越した存在と理解する。あらゆる概念に対する生命的契機
- [11] 特殊性：普遍者を理解するためのモデル、普遍者へと消失する補助線のごときものとして理解する。あらゆる概念に対する機械的契機。
- [12] 生命とは、普遍者として捉えられたとき生命と呼ばれる。他方、機械は普遍者としての地位を放棄され、特殊者 = 普遍者が成立するかのように捉えられるとき（そしてそれは実在物として捉えられることを含意するが）機械と呼ばれる。
- [13] 生命を例示する装置としての普遍性、特殊性こそ <生命>、<機械> なのである。
- [14] 普遍性が、観測者の営みの否定を逆説的に利用するのに対して、個別性とは否定それ自体なのである。

## 1.2 単独者に対する普遍的契機としての <時間> 1:146 a

- [1] 単独者を実在論に即して記述しようとするとき、「そこにある」という形式で述べることになる。すなわち局所の存在者である。ところが局所という概念は、それ自体語義矛盾である。... 故に単独者を記述しようとする試みは破綻し、記述は特殊な例としてのみ継起する。
- [2] 局所の1点を記述しようとする観測者は、対象たる局所を空間の1点とし、空間全体を見渡すことで外部観測者であり、その観測は観照者のそれである。この態度によって喚起される様相こそ <機械> なのである。
- [3] 局所の単独者を記述しようとする矛盾が、そのまま実体化されて、空間が構成されるのだ。局所という1点への向心性、局所を記述せんとすることで生じる遠心性、両者の成す矛盾を解消すべく空間が構成される。
- [4] <時間> は決して矛盾を解消せず、矛盾を先送りしつつ矛盾を生成する何物かとしてのみ現前する。空間とは実体化された矛盾を解消する装置なのである。  
言語は、元来、言葉の間に関係性、測度、位相を有するかのように使われるから、そこには既にして空間的契機が用意されている。
- [5] 私は存在する単独者と実在物とを明瞭に区別し得る方法論的理論を採用する。
- [6] 観測に起因する矛盾は既に先行的に空間を構成してしまっていることであたかも解消されたように潜伏する。かつ、それでもなお解消し得ないという矛盾の実相が、観測

者と空間との隔離において無視されてしまっている。

- [7] 他方<時間>、<生命>においては、観測者はかかる矛盾を無視しえない。矛盾に対して適当なところで思考停止できない。...だから、矛盾は決して解消し得ないことが受け入れられ、記述という視点への疑いが生起し、普遍性が生起するのである。

### 1.3 モチーフの転換：時間から生命へ 1:149

- [1] 我々がここえ扱うものは、相互作用する存在である。..実在と存在とを明瞭に区別するような装置として機能する理論を展開しよう。
- [2] 私は「我々が時間や生命に関心を持つのは、存在との関係に於いてのみ持つのである」と言い切る戦略をとることで、生命という言葉の、存在に対する使われ方のみを注視するのだ。
- [3] 我々は発見と構成とを区別できない。(同一視するのではない)存在者の発生論(構成論?)は、存在者のでっち上げを意図するものではなく、存在者を獲得する、発見する視座への転換を意図するものである。

### 1.4 普遍性、特殊性、個別性：その構成的理解へ向けて 1:152

- [1] 我々は、3つの契機を強く意識しながら、<生命>を構成することになる。普遍性、特殊性、個別性を、構成的に理解するのである。構成といっても、それはでっち挙げることを意味するのえもなく、記述を意味するのでもない。
- [2] 構成的理解の水先案内人が、先に揚げた観測者である。
- [3] 観照者、認識論的観測者：対象の外部に立って、対象を記述する観測者(観測の位置が単に内部に転換しても観照者に過ぎない)
- [4] <生命>を構成する観測者は、対象に参加する観測者である。

## 参考文献

- [1] Birkoff, G. Lattice Theory. AMS 1967. ISBN 0-8218-1025-1.
- [2] ソール A. クリプキ (黒崎宏訳)「ウィトゲンシュタインのパラドックス-規則・私的言語・他人の心-」産業図書 1983, ISBN 4-7828-0017-7.
- [3] A.W. ム - ア (石村多門訳)「無限 - その哲学と数学」東京電機大学出版局, 1996. ISBN 4-501-61490-0.
- [4] E. Nelson. Predicative arithmetic, Princeton University Press 1987, ISBN 0-691-08455-6.
- [5] 郡司ペギオー幸夫「生命と時間、そして原生-計算と存在論的観測」現代思想 1994.9, 11, 12, 1995.4, 5, 8, 12, 1996.6, 9, 11
- [6] 角田秀一郎「数学の脱構築」現代思想 1999.4.
- [7] 角田秀一郎「数学と複雑系」大阪大学集中講義 (理学研究科数学専攻) 1999.5.
- [8] 辻下 徹「生命と複雑系」(山口昌哉他著「複雑系の科学と現代思想 - 数学」青土社 1998, pp75-225.)
- [9] ウィトゲンシュタイン全集. 大修館書店 1976-1988. ISBN 4-469-11010-8(全 12 巻).